

【一番町保育園】●2024.10.31 ふりかえり(エコエデュスタッフ／遠藤先生知里先生)

スタッフ①:今日はお疲れさまでした。ありがとうございます。

全員:お疲れ様でした。

スタッフ①(3才担当):

では、3歳からふりかえっていきましょう。私から始めますね。

3歳の子、6名でした。みんな、本当に遊びが上手というか、見つける目がすごくあって、最初のお話をしているときから、もう、猫じゃらしを見つけて遊び始めるという感じでした。好奇心、意欲がすごくある子たちで、小さい黄色い花をふと見つけた子がいたのですが、それで色遊びをしたら、そこから色遊びブームが始まって、色の名前がすごくたくさん出てきました。「黄色は?」「緑は?」「青は?」「どこにあるの?」っていう感じです。

それで、「この色を見つけない」と言い、「じゃあ、見つけてみようか」と声掛けをしたら、ツユクサの黄色と青は見つけるんですけど、他の色がなかなか見つからなかったんですね。緑という観点がなかったというか、**葉っぱの緑は色がつかないという頭**だったみたいです。それで、少しヒントを与えてみたら、すぐに葉っぱをこすって、「あっ、緑だ」となりました。それから、「茶色は?」と聞いたら、土でやっていました。また、ねこじゃらしでやったら、「これはつかないね」と言うんですね。**「つかない」というところも、自分たちで発見していました。**

その場でずっと上遊べる子たちで、棒を見つけて「角!」と言って変装したり、バイオリンのようにして舞台の上で演奏したり、いろいろな見立て遊びがどんどん広がっていきました。みんなでキャツキャツと、とても楽しそうに遊べていました。

それからそのまま上の森の方にぐると行ったら、「ちょっと暗くなった」と、**少し暗くなると「怖い」という感情が出てきて**、やはり少し足がすくんでしまう子もいたんですね。でもそこで、先生が「大丈夫だよ」という声掛けはしてくれて、結局みんなで行きました。そうしたら、**みんなどんどん視野が広がっていった**のです。最初は、やはり下、色を見つけないということで、下を見ていたのですけれども、**だんだん視点が上**に行きました。「あっ、クモだ」と、クモの巣をすごくたくさん見つけていました。「あんな遠くにあるよ」と、本当に遠くのクモの巣を見つけた子もいて、本当に遠くに目線が行くようになりました。

そして戻ってきたら、「また行きたい」と言うのです。「怖いところに行けた、すごく楽しかった」という経験を一回したことが、「また行きたい」という気持ちにさせたのか、また戻りました。ですから、前半とは比べものにならないくらい移動距離がすごくありました。今日はそんなふうに終わりました。

ねらいに関してお話ししますと、園での広がりというのですが、「葉っぱは色がつかない」などの先入観があったようで、そこで伝えたことと、五感ですね、「ふわふわ」や「チクチク」な

どを意識して声掛けをしたことがあります。これが、園に戻ってもいつもとは違う目線でものごとを見られることにつながればいいな、と思っています。以上です。

スタッフ②(3才担当):

今のお話とは真逆な人たちが、うちの方は集まったみたいです。「何かやりたい？」と聞いたら、もう、鬼ごっこになってしまっていました。体を動かしたい人がそろってしまったようで、「じゃあ、探検に行こうか」と、お散歩のほうに誘導する感じで案内すると、どんどん先に行きたがるんですね。そこで別の遊びできるかと思って、「郵便局のところの坂、登ってみる？」と聞いたら、案外登れる人が多かったです。ただ、「手が汚れた」というか、「これはお気に入りだから汚したくないの」など言っている子がいて、でもみんながガンガン登っていくところを見ているうちに、もう、**自分も行きたくなって、結局気にせずに登れるようになりました**。草のところも、もうたくさん種がついてくるのですけれども、全然気にしないで、どんどん奥に行こうと動いてくれていました。とても歩きました。

何しろもう、「歩け、歩け」で、「ここ、入れるんじゃない?」、「こっちに行ったら、ここがつながっていた」などの声が聞けました。

そして、そうやって遊んでいたら、ある子が小さな葉っぱの芽を見つけたんですね。「あれ、これはなんだろうね」と引っ張ったら、「あれ、引っ張れない」、「あっ、抜いたら根っこがついていた」となり、さらに「これはなんだろう」と聞くと、今度は、皮がついている葉っぱを見つけてきたので、「あれっ、これはなんだろうね、ここ、取ってみる?」と聞いてみました。そうしたらその子はその皮を取って、「あっ、葉っぱが隠れてた」と気付いたのです。なんというか、段階を踏んだ発見がありました。

それから、やはりクモは気になったみたいです。クモの巣に葉っぱをくっつけていたのですが、つけたら落ちてしまう葉っぱがありました。それで、「この葉っぱはつく」「つかない」と発見するんですね。そこから、自分で糸をピーッと引っ張ってみて、「伸びる!」ということを見つけた子もいました。それぞれが気になるところが全然違っていました。ですから、一緒に行っていて面白かったです。

けれども、3歳児はなかなか難しいです。同じところを注目してくれないんです。「まだ行きたい」「こっち行きたい」などと言うので、まとめるのが難しいな、と改めて感じました。

スタッフ①:ねらいに関してはどうですか?

スタッフ②:

はい、ねらいを話すというよりも、もう、「今感じたことを感じよう」といった感じでした。それで、匂いを、「ちょっとクンクンしてみたら?」とか声を掛けたり、**「これは匂うかな?」と促したりしたのですけれども、あまり響かなかったですね**。そのところがなかなか難しかったと思っています。

感触に関してだけは、木がボロボロのところ、「これ、スカスカだけど、これは、なんか水を含んでる」という言葉が出てきたり、フカフカだったものよりも、ビロビロンと裂くと長いものができると気付いたり、体で感じてくれているのだな、と思わせる言葉が出たので、まあ、そこらへんかな、ということですね。手で触って感触で確かめてみるようには言ったのですが、すけれども、やはり、なかなか触れない人もいますね。「えっ、何？これは得体が知れない」という感じで、ひるんでいる子もいたのですが、友達に触っていると、少しだけ触ってみる、という感じでした。

スタッフ①：ありがとうございます。では、4才担当の方、いいですか。

スタッフ③(4才担当)：

はい。男の子が5人で女の子が1人という比率だったこともあって、もう元気いっぱいでしたね。「行きたい、行きたい、あっち行きたい」みたいな子たちだったんです。

カマキリの卵を見つけたときに、「なんだろう、これ」と声を掛けたら、「ん？」という感じで、みんなで集中して見ていたんです。そうしたら、誰かが「触ってみたらフカフカするよ」「卵だよ」と言いましたね。すると別の子は、「いやいや、卵じゃないよ、巣だよ」と言うのです。そうやって、一つのものから巣だったり卵だったり、自分の考えを伝えていくんですね。「じゃあ、卵だったら赤ちゃんがいるの？」と言う子がいたり、よく観察して、「穴がないから、これは、まだ中にいる」と言う子がいたりしました。私もつい、「いる？」と言いながら、「こんにちわ」と話し掛けてしまったのですが、子どもは、「いやあ、もう、これは、いないよ」と言ったりしていました。そうやって自然にあるものから自分の考えを伝えられる、そのための素材がとてもいっぱいある、というようなことがありました。トカゲのしっぽもそうで、「しっぽが切れているけれど、動いてるじゃん。ちょっと血が見えるよ」、「見せて、見せて」という言葉が出てきました。

ですからそういった身近なものというか、そういった自然物に心が動いて、そこから推測して、「そうかもしれない」「ああかもしれない」と言い出すところが、すごくいいなと思いました。それが多分、この目的の新たな視点というのでしょうか。何かを見つけた先で、見つけたものについて話し合いが持てるということが、幼児期にはとても大事かと思いました。

それから、こういうときには正解を言わなくてもよくて、「自分の考えたこと」を言うこと、自分で考える過程が大事なので、身近な公園ではないところでそういうことを言えること、衝撃的なものごとがある大自然であるということが、遊木の森に来る良さかな、と思いました。今日のグループの人たちの中にも、こんなミミズを見つけたときに、「怖い」と言う人、ミミズに向かって行く人、「これはなんでここにいるんだろう」、「どうしてこんなにおっきいんだろう」と考える人、いろいろいました。

スタッフ①：ねらいに関してはどうですか？

スタッフ③:

ねらいが、今お話ししたことでもいいですか?「**視点が広がるのではないか**」ということですよ。多分、園に帰って何かを見ても、「これはこうなんじゃない?」や「あなんじゃない?」と言うようになるかもしれません。

スタッフ①:ありがとうございます。では、次の方お願いします。

スタッフ④(4才担当):

私たちのチームは、初めのスタートの時に「この 6 人だね」と言ったら、その数字でもうみんなが「3 たす 3 が 6 で」など、言い始めてしまいました。

一同:ええー!?

スタッフ④:

まず数で盛り上がってしまったので、「ここからどうしよう」と思いました。その時に持っていた葉っぱがちょうど 5 枚ついていたので、「じゃあ、これは何個ある?」という話を始めたら、「あっ、5 だ」と言うんですね。「じゃあ、これは?」と聞いていったら、周りの葉っぱにも目を向けてくれて、なんとか、目の前の自然に目を向けることができました。そうしたら、「細長い」など、見た目の違いが座っている周りに本当にたくさんあったので、まずはそこで少し五感の練習をしました。「あっ、よく見られたね」、「じゃあ、ちょっと触ってみる?」、「匂い、嗅いでみよう」と、そこからスタートし、歩きながら、いろいろと見つけたものを取って比べました。ですから、初めは、**違いを見て楽しむ遊び**が結構ありました。

でも、もう少し違う遊びも…と思ったところで、ちょうどオオバコがあったので、「先生、これ、やったことあります?」と聞いてみたんですね。そうしたら、「あっ、あるある」と言ったので、一度、先生と一緒に「こうやって遊ぶんだよ」と見本を見せたら、子どもたちは、どのオオバコが強いかを探しながら遊び始めました。そして、「じゃあ、これはどうかな?」と、違う種類の植物も、とにかく細長いものを見つけてきて遊ぶ、と広がったのが面白かったです。**オオバコだけにとらわれない**というところですね。「これでも勝てるんじゃないか」と、いろいろ考えてやっていた遊びがはまりました。

あとは、やはり本当に歩きたい子たちだったので、先生に、「いつも歩きに行っているんですか?」と聞いたら、「しょっちゅうではないですけども、すごく好きです」と言うので、中の方に入ってみたんですね。そうしたら、道のないところにわざと入って、その上の段まで上がるという探検を、みんなとても楽しんでいました。そこを登って下りて、登って下りて、とぐるぐるまわっていました。中にはやはり、「先に行きたい」と言う子がいたので、「じゃあ、行ってみよう」と声を掛けたら、みんなが道を探すんです。「ここ行けるかな」、「こっちはどう」

という、探す遊びが始まりました。そして進んでみたらクモがいて、「キャー」と言いながら戻ってきた、ということもありました。「あっちに行ったらハートの葉っぱがあった」など、みんな報告してくれて、さらに、「じゃあ、見に行ってみようか」とみんなで見に行きました。ですから、みんなにもルートを決めてもらった、という感じでした。「どうする？こっちを下りる？」と聞くと、「まだ行く」と言うので、あんなほうまで行くつもりはなかったのですけれども、行きましたよ。

その先でミミズを見つけて、触れない子もカップに入れてあげたらみんなで見られた、ということもありました。とてもよく観察する子たちでした。小さな花の中も見て、「なんかある」と、むいてみるのが自然にできていました。カヤの実も、「なんか、泡が出てきた」と言うのですが、それはなんだか怖かったのか気持ち悪いと思ったのか、自分で割れず、「割って」と言うんですね。それで割ってあげたら、「お豆が出てきた」と言っていました。いろいろと、子どもたちが自然に遊びを見つけるんです。ねこじゃらしも、1 人が「豆みたい」と言ったら、すぐにほぐす遊びが始まりました。そしてある子が、「ご飯みたい」と言い出し、「じゃあ、ちょっとお皿探そう」と言って、大きめの葉っぱをお皿にして、その上にほぐしたものを載せていました。それから、アカマンマも、「これもほぐれそう」と言いながらちょっと遊び始めるんですね。それで私が、「これ、フーツってしたら飛ぶかな」と聞いてみたら、最後は、もうみんなが「フーツ」と飛ばして遊んでいました。その後、「次のところに行こう」と場所が移れたのだったでしょうか。

こんなふうに、1 カ所で結構遊べました。ねらいとしては、いつもよりものごとをよく見て、自分で遊びを考える。考えつくというところまでは少し難しいかもしれないけれども、「何かやってみよう」と思ったのではないのでしょうか。

上に登ったときに、たまたま赤い葉っぱを拾った子がいたので、「あっ、危ない葉っぱって言ったけど、このことだよ」と話したんです。「こっちは危ないけれども、こっちはいいんだよ」と話しました。そして、「だから、赤い葉っぱを拾うときは、また声を掛けてね」と言ったら、最初に見せてくれた子が、ここに来たときに、「この葉っぱを拾っていい？」と言うんです。しっかり聞いてくれてたんですね。先生もそれを聞いて、「ああ、さっきのお話をちゃんと聞いていたんだね」と言われていました。そういう話が頭に残っていることに、先生もとてもびっくりされていました。普段あまり話を聞いていなさそうな子らしいです。やはり、こういうところ来ると子ども自身が楽しいのか、自然と、いろいろなことをきちんと聞けるみたいです。

スタッフ①：ありがとうございます。では、5 歳にいきましょう。

スタッフ⑤(5 才担当)：

私は 5 歳児担当でしたが、6 歳に近い子ども 6 人でしたね。

まず今日は原っぱで、とにかく虫を見つけようということで、虫を見つけてケースに入れて観察しました。最初は、私の見つけたシジミというのでしょうか、チョウの小さいものをケースに入れたのですが、「あっ、ずるい」、「もうつかまえたの?」と言われました。「こういうふうに、普段見ている大きさではなくて、拡大して見ることができるよ」ということで説明をして、そうしたら、もう次から次へと虫を集めてくれました。それをみんなで見ましたね。あと、「葉っぱとか植物なんかは、逃げないからルーペで見ればいいよ」と、ルーペを渡したら、また子どもたちがそれで見ていました。

そんなふうに、今日はとにかく虫を中心に攻めてみました。それで、時間がずいぶん経ってから、もう最後のほうでのことなのですけども、カマキリを見つけた子がいたんですよ。カマキリを見つけて、自分で誘導してケースに入れたんです。そして、その子は「つかまえたよ!」と言って先生のところに見せにいったんです。そうしたら、先生が、カマキリがご飯を食べるところがすごく美しいから、それを見せたいからと、一生懸命小さいチョウチョを探したんですけど、結局捕まえられませんでした。残念がっていましたね。そんな感じで、先生も結構楽しんでいただいていたのではないかと思います。自分の帽子で、一生懸命、採ろうとしていました。

ということで、そのカマキリが一番、みんな盛り上がりました。あと、クモです。普段はクモなんて、「もう嫌、キャー」、「怖い」という感じでしょうけど、誰かが葉っぱにくっつけてケースに入れました。最初は、それを見せられても「ギャー」などと言いながら、みんな逃げていくんですね。けれども、その後はまた見に来るんです。「しっかりと見よう」というような気持ちがあったと思います。それから、落ち葉のカサカサなど、そういう音を聞かせようかと思ったんですけども、湿っていました。バサッバサッとしてみたら、子どもが、「なんだかウンチみたいなおいがする」と。「臭い、臭い」と言っていました。それは失敗でした。

それと、最後の振り返りで発表した子は、なかなかいろいろなものを見つけていました。タデみたいなものも、こうやって引っ張ったら根っこから取れてしまった、という感じで、しかもきれいだから、「持って帰りたい」と言うんですよ。ただ、「根っこは嫌だから根っこだけ切ってくれ」と言われました。それで切ってあげました。その子は、石も探したんですよ。きれいな石を見つけて、「これ、石がすごくきれいなんだ」と見せてくれました。いろいろな石を見つけてくれて、「なかなかいろいろと観察しているな」と思いました。

ただ 1 点、反省していることがあります。もう少し私のほうも積極的に言えばよかったのですが、途中で、水分補給のタイムを取ったとき、水を飲む子が、3、4 人だったか、2 人か 3 人だったか、グループの半分ぐらいでした。ほかの子は飲まなくて、これだけ気温も下がってきているとはいえ、やはり水分補給の時間を取ったときは、全員が飲むのを確認したほう

がいい、と反省しています。

こんな感じです。子どもたちは、もう結構いろいろなことを知っていますし、楽しい遊び方も自分たちでのほうで知っているものですから、私はただ付き添いでいた、という感じでしたね。

それから先生には、栗の実が入っていない部分でも遊べるし、あとはクヌギも、園に帰ってから、お人形さんが作れますから、「こういうのもできる」と教えました。やはり先生は「子どもたちにいろいろ教えてやりたい」と思ってもなかなか教えられないと思います。そういうことは言ってもいいかと思います。先生のスキルも上がると思うので、そういった話はしました。以上です。

スタッフ①：ねらいに関してはどうですか。

スタッフ⑤：

今言ったようなことや色の遊びなどは、園の近くでもお花もあるし葉っぱもあってできますから、園に帰ってそういう遊びをしてくださいね、と伝えました。子どもたちも「園に帰ったらこれをやってね」とか。

スタッフ①：はい、ありがとうございます。では、次の方お願いします。

スタッフ⑥(5才担当)：

私のところのねらいは、**五感のうちの特に「触る」と「におい」をたくさん持って帰ってもらいたい**、ということでした。それで、まず、触る前に、「これって、どんな感じがすると思う？」と話して、予想してもらいました。そして、「ふわふわするんじゃないか」、「〇〇じゃないか」など、みんなの意見を聞いて、それで、「実際に触ったらこうだった」ということを感じてもらいました。さらに、触った後にセットで、「もによもによしてみて」「においかいでみて」まで話をもっていきました。みんなに「予想と確かめ」のようなことをやってもらいました。そんなふうには、ただ自然物に触れるだけではなく、もっと**記憶にいろいろと残ればいいな、園でもいろいろな違いなどを発見してもらえばいいな**、と思ってやりました。

今日の私の最初の仕込みは、カナヘビでした。カナヘビとは言わないで、「今日はこんな宝物見つけたんだ」と言ったら、「あっ、園にもいる！」と言うんですね。「ああー、いるんだな」と思ったら、「ヤモリ！」と言うので、「えっ、そのヤモリ、どんな感じだった？この子と同じかな？」と聞いてみました。やはり、違うんですね。「私の家でもヤモリを飼っているのだけど、壁にベタってついているよ」みたいなことを言うので、「この子は壁につきそうかな」と聞いたのですが、ピンとこなかったようで、私が持って、触らせてみました。園のヤモリにどのくらい触れているのか分からないですし、もしかしたら見ているだけなのかもしれないと思っ

て、それがまだ全然結びついていないので、今日は、「カナヘビ、ごめんね」というぐらい、さんざんみんなにもてあそんでもらいました。

うちのチームはアクティブちゃんたちがそろっていて、あまり分からないですけども、何しろ、足腰が強かったです。坂道があったら、もうすぐに登りたがるんです。「あっちに行ってみよう」と思ったら、もう、「ここの坂を登っていく」、「いいじゃん、ここを行こうよ」といった感じで、ガーツと進んでいくので頼もしかったです。

そして、好奇心もものすごく旺盛で、その場所から興味がたくさん生まれてくるので、なかなか移動できませんでした。ですから、すみません、遅くなりました。

スタッフ①:確かに、すぐそこにいたのに全然下りてこないな、と思っていました。

スタッフ⑥:

すみません(苦笑)

今日は、こちらから促したものもたくさんありますが、子どもたちに「何かできそうかな」と声を掛けたら、なんとなく遊びが生まれそうな雰囲気のところまでいったので、園でもいろいろと発揮してくれるのではないのでしょうか。

ススキを投げて飛ばしっこをしていたときも、いろいろなことが同時進行で起きました。「この色は何色が出そうかな」というような予想をしてやっていたのですけれども、何の植物だったか、種がポロポロするもので、「この色を塗りたい!」とやり始めた子が、「色が出ないね。なんで出ないのかな」「これ、全然色がつかないね。なんでかな?」と気付いて、カサカサの葉っぱも持ってきて、「あら、これもなんでつかないのかな」と気付いたんですね。そこはもうそれでおしまいだったのですが、ススキを束にしてきた子が、「あっ、掃いてあげる」とパタパタ掃いていました。「すごい!これ、ほうきだ!」と、そんな遊びも生まれました。遊びなのかいろいろな発明なのか、いろいろなごっこ遊び、見立て遊びが随所に見られました。子どもたちは面白かったので、午後も一緒に遊びたい、となりました。

スタッフ①:すごい!すごいです。

スタッフ⑥:少人数は本当にいいですね。

一同:はい。

スタッフ⑥:

今日は5人グループで、女の子3人、男の子2人だったのですが、10人以下というこの人数だと面白いですね。これはいいな、と思いました。園で、先生の、「こんなことがありました」ということがどんどん発展してくれればうれしい、と思っています。以上です。

スタッフ①: はい、ありがとうございます。では、遠藤先生お願いします。

遠藤先生:

はい。今日は、ありがとうございました。

今日、見ていてやっぱりいいな、と思ったのが、**指導者がきちんと立ち止まる**ということです。もう本当に当たり前のことで、皆さんは、恐らく、ご自身も「これ、面白い」と思ったところで立ち止まられているだけだと思うのですけれども、それがとても大事な、ということを感じました。というのも、**動きたい子どもたちが多いというのは、安心して**いるから、ということであるので。

一同: なるほどー。

遠藤先生: どこかに行ってしまうても安心と思っているから先にどんどん行って…。

スタッフ①: 行ってましたね。

遠藤先生:

そうです。「行ってしまうてもいいかもしれない」と思っているのは、やはり、なんというか、**指導者と一緒にいることの安心感**のようなものができてしまっているからこそです。だからあちこちに行ってしまうのだと思うので、それは、第一段階として、とても大事なことだと思います。

それと、やはり、指導者の立ち位置というのは大事なんです。われわれですと、立ち止まってしゃがんでいろいろとしていても、「あっ、子どもが行っちゃったな」などだいたい分かっているでしょう。でも、大勢の子どもたちを連れてきて安全管理をしなければいけない状況だと、やはりしゃがみこめないと思うのですよ。でも、しゃがみこんでも大丈夫なんです。そんなところを、園の先生たち、特に若い先生たちに気付いてもらえるといいな、と思いました。ありがとうございます。

スタッフ①: ありがとうございます。ヒヤリハットは、何かありましたか？

スタッフ⑦:

体験で軍手をする、しないという話ですけれども、今回、軍手はしないでいろいろなものを触ったりしていくことを優先しよう、ということで軍手なしとしたんです。

今日のように、例えば、グループの人数がとても少ないときはお世話もできますし。活動内容のどこを重心に置くかというところがもう少しはっきりしていれば、そのあたりの判

断できたのかな。

スタッフ⑥: 幼児は、着脱するだけで結構時間かかりますしね。

スタッフ①:

時間がかかってしまったりするので、優先順位を決めて。そのあたりも、初めにいろいろと共有しておけばよかったかもしれないですね。

スタッフ⑦: そうですね。

スタッフ①: それではこの辺りで終りたいと思います。皆さん、ありがとうございました。

一同: ありがとうございました。